



トマト類の冬季の栽培管理

鈴木 真理恵

トマト類の促成長期栽培では、11月～2月は日射量や気温が低下するため、草勢が弱くなりやすく、生育が不安定となる時期です。日射量や気温の低下により、水や肥料の吸収も減少します。なお、日射量が最も少なくなるのは12月なのに対して、気温が最も低くなるのは1月です。冬季のトマト類の生育を安定させるためには、日射量の推移と気温の推移のズレを意識した管理が必要です。

1. 気温と日射量の変化に合わせた栽培管理

冬季は開花から収穫までの時間が長いことから、着果負荷が大きくなります。そこで、果実に日光を当てて果実温度を上げて着色を促し、収穫を早めて着果負荷を軽減することが重要となります。

また、冬季は夜間にハウスを閉めるため、多湿となり病気が発生しやすくなります。さらに、朝方の温度の急上昇により果実が結露する状態となると、急激に果実へ水分が流入して、裂果の原因となります。病気や裂果の発生は収量の減少を招くため、加温や換気などの対策が必要です。

11月中旬から1月中旬にかけて日射量の少ない時期が続きますが、1月下旬ごろから日射量は増加します。

2. 栽培管理のポイント

(1) 摘葉

11月中旬から1月中旬の日射量が不足する時期は、果実に日光を当てるために収穫果房から着色果房付近の下葉や果房にかかる葉を摘葉し、10～12枚/枝程度になるようにしましょう。ただし、摘葉は草勢を弱らせる原因になるため、一度に多く摘葉せず、1回2～3枚程度とします。また、茎が細いときや葉が小さいときなど、草勢が弱い場合は摘葉を控え、13～15枚/枝程度になるようにしましょう。通路側にしゃがんで果実を見通せると良いです。

(2) 温度管理（表）と日射量に合わせたかん水・追肥

冬季のハウス内日平均温度は16～18℃を目安にします。また、生育速度は日平均温度によってある程度操作できるため、草勢が弱いときは平均温度を下げ、草勢が強いときは平均温度を上げることで草勢を調節することが可能です。最高・最低温度を適温の範囲に保つ温度管理だけでなく、1日の平均温度や昼間と夜間の温度を調節することで、草勢や生育を調節することができます。

夜間はハウス内温度が12～13℃と

なるように暖房機を稼働させ、早朝に15～16℃となるように加温します。夜間に暖房機が稼働しないと、多湿となり病気が発生しやすくなるため、ある程度暖房機が稼働するように設定温度を調節しましょう。また、朝方の急な温度上昇により果実と周囲に温度差が生じることで結露が発生しやすくなります。そのため、日の出前から加温をして、事前にハウス内温度と果実温度を上げておきます。日の出後は、早めに換気を行うことで、除湿とともにハウス内温度の急上昇を防ぎます。早朝加温と換気を行い、ゆっくりと温度が上がるようにします。

1月下旬ごろからは日射量が増加してハウス内温度が上昇しやすくなり、換気による乾いた空気の流入で萎れが発生します。1月～2月は外気温が低いのでかん水・施肥を控えますが、日射量の増加に合わせてかん水量を増加し、追肥することで、養水分の吸収を促して萎れの発生を防ぎます。気温と日射量の変化に合わせた管理を行い、生育の安定と病気や生理障害の発生を防いで、冬季以降も安定した収量を確保できるようにしましょう。

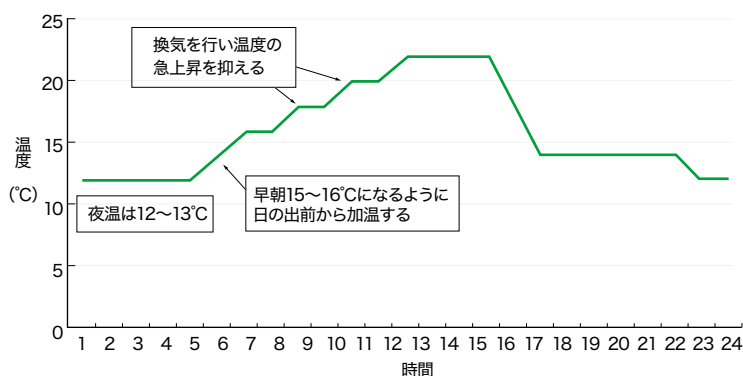


表 冬季の温度管理のイメージ